

◎お歯黒のメイク中—松竹京都撮影所のメイク室で◎怪しげな妖怪の完成—いずれも本人提供



# 見よ見まね 自らメイク

大部屋出身の俳優 土平ドンペイさん(52)——草津市

はい上がる人

わたしの歩跡

▲「日本のハリウッド」と称された太秦(京都市右京区)。1986年の大映の閉鎖後、撮影所は二つになっていた。映画村で知られる東映と、松竹と。車で2、3分しか離れていない。仕出し(エキストラ)はそれぞれに所属するが、人手が必要なときは貸し借りも行われた。観光客と記念撮影をする扮装バイトをやめたのに、東映では仕出しの仕事がなかったんです。松竹にも大部屋があって、知り合いに聞くと「仕出しやったらすぐあるで」。東映の所長さんの所に行くと「すみません。松竹へ行かせてください」とお願いしたんです。「普通、それはあかんんで。ただ、土平君の場合は状況が状況やし、どうしても納得してやめたいんやったら許してあげるわ」って、きれいに送り出してくださって。松竹の大部屋俳優が所属する「エクラン演技集団」(当時)へ移ったら、人気ドラマだった「鬼平犯科帳」とか、「必殺シリーズ」とかやってるんですよ。平日は仕事なので「土日と祭日だけです」って言うたら、ほぼそれが埋まるくらい撮影が入る。これはおもしろいなあ。

前日の夕方、大部屋に次の日の予定が「行商人が4、誰誰々と誰」と張り出されるんです。休みの日はエクランの女性社長に電話して。「あしたあります

## 松竹移り撮影大忙し

か「土平、深作組(作品の監督名)の行商人な。8時出発のロケやし」。時代劇が多くて、撮影所のオープンセットなら8時開始、ロケなら8時出発とか。基本は「1時間前に入りなさい」ってずっと言われてました。

1時間前に浴衣に着替えて、時代劇は頭から作るんですね。東京から来られた俳優さんは「ここ座って」って言われて、文字通り髪を結う、結髪さんが、カツラをかぶる下地になる羽二重から、メイクも全部やって、「衣装行ってください」と送り出されるんです。でも僕ら京都の大部屋俳優は全部自分でやるんです。メイク室の端っこに座って、地肌の境目がわからないように羽二重を綺麗につけて、鏡を見ながら自分でメイクをして、最後に役柄に応じて武士の御家人用か、町人用のカツラをかぶるんです。

それから衣装部へ行って「何々組の行商です」って言うつと、「そこに置いたから」。衣装がいっぱい積んである細い通路の奥へ行って、行商人の服に着替えて「ありがとございませしたあ」って、大部屋に戻って出番を待つんです。

メイクのやり方は、見よう見まねで覚えないうちは何も教

えてもらえませんか。頭の青い部分を作るには、何を塗ってるんやろ? カツラの網はどうやってたら綺麗に張れるんやろ? 優しい先輩は「これとこれやん」と教えてくれるんですけど、イケズな人やったら「そんなんも知らんのかい」ですわ。

カツラをかぶった土平ドンペイさん。羽二重と地肌の境がわからないくらい自然に仕上げています。



羽二重の境を綺麗に消すのも、なかなかテクニックいるんですけど、竹ペラを綺麗に削って自分で作っていましたね。粘土みたいなものをごねごねして、おでこに張り付けて、水でダーツしながら伸ばして。水を含んだ手拭いを硬くしておいて、パンパンパンとはたくると頭の表面が平らになって見た目にはわからなくなるんです。最初の頃は、境目がバキッとわかる状態で現場に行くと、結髪さんに怒られて。「カメラ映るやん、行くなよ」

【エリア編集委員・大澤重人】

二つ二つへ、水曜掲載

### 「縁も実力のうち」と感想

ドンペイさんがフエイスブックで発信中。「運も実力のうち」って言うけど「縁も実力のうち」です。ね」という感想が寄せられ、ドンペイさんが「僕の職業はほとんどが『運と縁』で成り立っています」と返信しました。